

# 李登輝氏の葬儀を前に考える

## 正論



拓殖大学学事顧問  
渡辺 利夫

台湾、「小国寡民」のこの島が自由と民主主義を擁し、高所得と高度技術をもつ存在として立国しているのはまことに稀有なことなのである。

大陸での国共内戦に敗れた国民党が台湾に敗走してこを占領、台湾は中華民国の一部として国民党の支配下におかれ、そうしてこの中華民国が大陸を含む中国全土の正統的国家であるという虚構がつくりあげられた。

### 李登輝元総統と民主化

台湾は大陸との内戦状態におかれ、自由や民主主義などとは無縁の専制政治が敷かれた。蒋介石の後継総統・蔣経国の急死により、台湾人（本省人）初の総統の座に就いたのが李登輝である。しかし、大陸出身者（外省人）の力はなお強く、李登輝の民主化への意思は容易に顕現しなかった。

李登輝は1990年、初の総統選に臨み、噴きあがる若者を中心とする民意を背けて勝利、暫定的な総統から真の総統へと変じた。たまたに「国是会議」を開き民主化への最大の障壁「動員戡乱

時期臨時條款」（反乱平定時期臨時條款）を廃止した。台湾に逃亡して以来、40年以上も改選されずにいた「万年議員」を辞職に追い込んだ。これも民選へと転換させた。

李登輝の心中にあったものは「脱中華民国」であり、「中華民国体制」という虚構からの脱却である。共産党を反乱団体とする規定を廃し、かつ自らの主権の及ぶところを台湾本島、金門、馬祖などの離島に限定した。共産党による大陸支配の容認でもあった。

大連中国との関係をどうするか。李登輝は直属の対中政策諮問機関「国家統一委員会」を立ちあげ、「国家統一綱領」を制定した。中台の統一には「人間の尊厳の擁護、民主主義的な法治の実践」が不可欠との認識が表出され、統一はその条件が整うまで段階をわけて逐次的になされるべきことが提起された。

台湾の位置づけをより高める

つづく画期が中台関係の「新定義」であった。1999年、海外メディアの取材に答えて、李登輝の位置づけは国家と国家、少なくとも特殊な国と国の関係になつており、合法政府と反乱団体、中央政府と地方政府という、一つの中国における内部関係では決してない。

台外交を担当する行政院大陸委員会の主任委員に就任、「二国論」を定着させることに尽力した。「特殊な国と国の関係論」を台湾独立を主張するラディカルな独立派ではない。そうではなく、中華民国はすでに独立国家であり、改めて独立を宣言する必要はないと考える。「天然独」である。事実、今年1月の総統選直後の記者会見でそう明言した。この明言について蔡英文はわれわれは「中華民國」ではなく「中華民国台

湾」だと語った。蔡英文の真意の在り処を伝える貴重なメッセージであろう。

李登輝の用語法が「中華民國在」である。しかし、蔡英文のいう「中華民国台湾」においては、中華民國と台湾は同格であり、李登輝の用語法よりも台湾の位置づけをより高め、中華民國のそれをより低いものとしている。蔡英文は本当は中華民國台湾ではなく「台湾」と言っていた。これは中国のことも中国の内強硬派からの猛烈な反発が避けられない。総統としての最大限の表現が中華民國台湾だったのである。

中華民國体制からの脱却をめざして政治的人生を紡いできた李登輝自身は、後年、いよいよ強く台湾の政治的ポジションについての思いを深め、「台湾共和国」として新憲法を制定すべしと主張するようになされた。

日本にとっての大きな人物 冒頭、私は台湾という「小国寡民」の島が確たる存在として立国だと述べた。国民党による専制政治は台湾住民には実に苛酷なものであった。しかし、その時点、第二次大戦での敗北により日本の台湾統治はすでに終了していた。日本統治終焉後の空隙をつくかのようになつてきた外來政權・国民党が台湾を支配下においたのだが、仮にこの事実がなかったとしたら、その後の台湾はどうなっていたのだろうか。

オピニオン

わたなべ としお